

平和への願い

渥美伊都子



早いもので、当財団も今年第9期生を迎えました。同窓生も年々増え、本年度の12名を加えますと百名を越え、ネットワークも広がって参りました。これも皆様からのご支援ご協力のおかげと感謝しております。

この不況の時代に予定の収入が確保できず、財団の経営には大変苦労しておりますが、事業はできるだけ当初の計画通り続けたいと思っております。最近、テロ、イラク戦争、SARS等の問題が起こり、青少年国際交流の推進が困難になって参りました。

イラクの戦争が始まったときには、大きな疑問を感じました。世界中の国が集まる国連において話し合いで解決されるべきものと思っておりました。国連の安全保障理事会では、多くの国が大量破壊兵器の査察を継続し、非暴力的な方法で解決しようとしていたのに、そして全世界で反戦運動が盛んであったのに、何故査察を中断して攻撃に踏み切らなければならなかったのでしょうか。イラクに問題があったとしても、何とか平和的な手段でと願っていました。

1945年3月10日の東京大空襲の時、私は大塚の家から下町の空が真っ赤に燃えるのを見ていました。その頃は、毎日のようにB29が頭の上を飛んでいき不気味でした。その後、軽井沢に疎開しましたが、大塚の家は4月13日の空襲で全焼し、私の思い出の品々はなくなりました。3月の軽井沢はとても寒く、だるまストーブを囲んで一家で過ごしました。その後、終戦を経て9月に学校が始まるまで、畑を作ったり農家へ買出しにいたりして凌ぎました。召集された従兄弟たちが相次いで戦死し、新聞やラジオで発表される戦死者の数は増え続け、南方からは次々と玉砕のニュースがはいり、アメリカ軍が侵攻してきたらどうなるのかという不安とともに、このような戦争は二度としてほしくないと思ったものでした。

1961年、長男が11歳の時に、学校からCISV（国際こども村）に参加しないかと誘われました。アメリカの心理学者D.アレン博士が1951年に始めた平和教育活動です。博士は、悲惨な大戦の後、息子から「僕も大人になったら兵士として戦わなければならないの？」と質問を受けた時に「どうしたら平和な世界ができるのか」と思い悩んだ結果、「戦争の惨禍が繰り返されるのは人々が心の底に偏見を持っているから」と考え、その偏見をなくす為には、子供たちから始めなければならないという結論を達しました。人間の判断は幼少時の体験に基づくことが多いからです。CISVでは、同じ人間として共通点を認識し、お互いの考え方の違いを認め、理解・忍耐・友情・平和・人類愛を育むために、世界各国の子供たちを集めて1ヶ月の共同生活を実際に体験させています。現在では、毎年7千人を越す青少年が世界各国で開催されるプログラムに参加しています。主人と私はこの趣旨に賛同して子供を参加させ、その後ずっと（社）CISV日本協会の活動を支援しています。博士は昨年101歳で亡くなりましたが、今回のイラク戦争の時には、博士の母国でありCISV発生の地であるアメリカが国連決議もなしに攻撃を始めたことに戸惑い、また博士の夢を支えてきた何十万人もの世界中のボランティアの地道な努力が、あっけなく粉碎されたような無力感さえ感じました。

1993年に主人が亡くなり、その遺志を継いで留学生を支援する財団を設立しました。渥美奨学生には中国・韓国を中心にアジア各国から渡日して研究をしている方が多いですが、元奨学生を中心に2000年に設立した関口グローバル研究会（SGRA：セグラ）が「よき地球市民の実現」を目標としているように、皆さん国境を越えて活躍されています。これからますます厳しい世の中になりそうですが、渥美奨学生の皆さんは、決してあきらめることなく、平和な世界の建設に貢献していただきたいと思っております。

